

令和7年度学校評価表

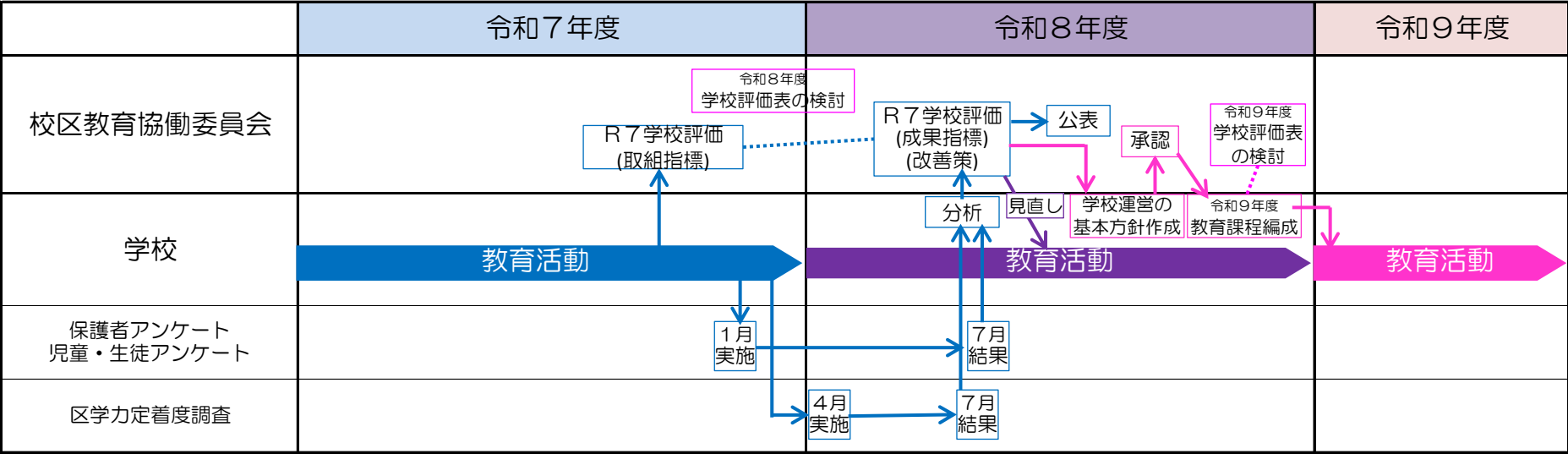
品川区立大原小学校	校長	森下 久仁子
大原小学校校区教育協働委員会	委員長	中村 和弘

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		①3～6年生で教科担任制を取り入れ、教師の教科における専門性を生かした指導を行う。 ・発達段階に応じた段階的な教科担任制の導入する。 ②課題解決学習を積極的に取り入れ推進する。 ・児童が主体的に追究できる課題や活動を設定し、学習の中で児童が粘り強く取り組むための指導計画を立てる。 ③基礎学力が定着する授業を展開する。 ・読む、書く、計算する、の学習について、基礎タイムの時間を活用して、より一層の基礎学力の定着を図る。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	3～6年生で教科担任制を取り入れ、専門的な知識に基づいた指導を行う。1～4年生でも、適宜交換授業を取り入れる。	教科担任を取り入れたことで、教員にとって、教材研究に時間を割くことができ、授業の質を高めることができた。また、学年全体で児童を見守る体制を整えることができた。	A	学級担任12名のうち、5名が経験年数が5年以下の教員である。教材研究の時間を確保するとともに、授業力の向上を目指し、校内における研修体制を充実させる。
	児童がお互いの考え方を知り、思考の幅を広げるために、授業の中で効果があると思われる場面では、ICTを積極的に活用する。	ICTを効果的に活用し、お互いの作品や考え方などを交流することができた。	A	
②	国・区学力調査の結果を分析し、学び残しが多い内容を把握する。各教科のワークテスト平均正答率85%を達成できる。	各教科のワークテストの平均正答率については、85パーセントを達成しつつあるが、上位層と下位層には差が見られるため、下位層の底上げが課題である。	B	下位層の底上げが課題である。基礎学力の定着を図るための習熟度別学習や個別支援についての手だてを、学力向上委員会を中心に検討し、実践していく。
	基礎タイムのスタイルについて、年間を通して各学年で実践したことを振り返る。「がんばりウィーク」を設定し、個に応じた指導を行う。また、調査結果の分析を基に、学力向上委員会が中心となって日常の授業改善を図る。	年間を通して、基礎タイムに実施する内容について、各学年で精査し、実態に合わせて取り組ませた。がんばりウィークでは、ミライシードを活用して、児童自身の学力に適した教材に取り組ませるなど、効果的な活用を見出すことができた。	B	
③	「自ら学びに向かう児童の育成～個々の児童に適した授業展開を通して～」を校内研究の研究主題として、教師の日常的な授業改善に努める。	授業を参観し、協議したり講師の先生の講話を聞いたりすることで学んだことを、普段の授業づくりに生かすことができた。	A	各学年で行った研究授業の後には、毎回、国語科を専門とする講師の先生から指導を受け事後に生かした。国語科のみならず各教科に派生させて授業改善と授業力の向上を目指していく。
	児童の発達段階に応じ、目指す児童像を設定し、教師が日常の授業の発問を工夫することで、児童個々の考えの形成につなげ、基礎学力の向上を目指す。	年間を通して、校内研究会を7回(基調講演1回、授業研究6回)行った。実践的な研究を通して、講師の先生から学んだことを生かし、授業改善をすることで、児童の基礎学力向上へつながった。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		①豊かな心を育成する。 ・生命尊重・人権尊重の教育を全校体制で組織的・計画的に推進する。 ・教育課程全般において、コミュニケーション能力を育成を図る。 ②ウェルビーイング教育の推進 ・特別推進校として、区内の学校に広く授業を公開する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	挨拶・礼儀・マナーやルールの大切さについて、教育活動全般において指導・支援を重ね、実践につなげる。	挨拶など、子どもにもよるができていない子とそうでない子がいる。代表委員会で挨拶運動で呼びかけている。	B	あいさつをしようという意欲はあるものの、声が小さかったり自分からあいさつすることが難しい児童が多い。大人から率先してあいさつをする姿勢を示す。 異学年が集まる集会では、自分から相手に話しかけられない児童も見られる。日頃の授業を中心として教師が意図的に声をかけるようにする。
	「いいことみつけ集会」や代表委員会集会での周知、校外学習時の出発式・帰校式の場面、朝の会や帰りの会での児童同士での見取りや励行を通して、学期毎にクラスで全員が認められ、褒められる場面を設定する。	継続的に取り組んでいる「いいことみつけ集会」では、全児童が自分のいいところを見付ける意識と習慣につなげることができた。また、友達のいいところを見付けることによって他者理解や人間関係の構築にもつながった。	A	
②	多様性・多文化共生への取り組みを紹介、実践することで、児童に理解啓発を図る。	聴覚障害者の方の講話を聞き、聴覚に障害のある方の生活について知る機会を設けた。手話の作法を学び、耳の聞こえない方との関わり方について理解を深めた。	A	講師の先生を予算内で探すことに苦労した。限られた予算内で実施する工夫に努めるとともに視聴覚教材も活用していく。
	本年度の東京デフリンピックを機に、特設掲示を活用して意識を高める。また、手話体験、競技体験を、年度末までに2回以上行う。	デフリンピックが開催されたこともあり、掲示を通して周知することができた。また、聴覚障害者協会の方を講師に、手話についての講話を2回(1～3年、4～6年)を実施した。	A	
③	区のウェルビーイング教育の推進校として、校内に限らず、広く区内の学校にも授業を公開する。	講師の先生による校内研修会を1回、区内の学校を対象とした公開授業を1回(約50名が参観)、担当教員による研修を3回実施し、区内全体に向けて推進することができた。	A	取組の学級間の差や継続的な実践・成果の検証が課題である。実践事例を共有し、アンケートで児童の変容を把握して取組の改善につなげる。周年カウントダウン、記念音楽会・展覧会等を行っていく。地域の方のお話や過去の資料、周年式典に向けた取組の中で大原小の歴史や成り立ちを学び、愛校心を育んでいく。
	本校は令和8年度に開校100周年を迎える。このことに向けて、今年度から学校や地域を愛する心を育む教育活動を行う。	開校100周年記念式典に向けて、マスコットキャラクターを児童から募集し、児童の投票をもとに決定した。令和8年度の行事は全て「開校100周年記念」として、児童が100周年であることを意識できるようにするとともに、地域の方々からの期待や思いを実感できるようにし	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○組織的・計画的に体力向上・健康保持と増進に取り組む。 ・日常的な運動の場面を設定し、参加率向上に向けて工夫した取組を行う。 ・コーディネーショントレーニングの継続により、体幹強化・姿勢保持につなげる。 ・家庭と連携した食育活動を推進する。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	8割以上の児童が、日常的な運動の場にすんで参加することができる。	休み時間の外遊びは、毎回割6以上の児童が外で体を動かす活動に参加していた。	B	朝スポ、スポトラ、なわとび週間を中心に、児童が体を動かす習慣が身に付いてきた。今後は、朝スポのボランティアを、さらに増やすことを目指す。
	「朝スポ」「スポトラ」「なわとび週間」や毎日の外遊び・体育館遊びなど、1日1回以上の体を動かす時間を確保し、「早寝・早起き・朝ごはん」の意識の啓発と体力づくりに取り組む。	朝スポ、スポトラ、なわとび週間を中心に児童が積極的に体を動かす習慣が身に付いている。保健給食委員会の集会で早寝早起き朝ごはんの啓発を行った。	A	
②	年間を通してコーディネーショントレーニングを実践し、体幹強化や授業時の姿勢保持・集中力向上につなげる。	体育朝会を通して、コーディネーショントレーニングを行った。授業の始めや終わりの時の姿勢の保持に、効果があった。	B	学校全体で行う継続的な取組は、全教職員の共通理解が不可欠である。児童に効果的に指導するためにも、教職員間で理解啓発を行う。
	コーディネーショントレーニングを全学年の体育の授業に位置付け、年間を通して継続して実践する。授業の始まりや終わり、話を聞く場面では、「腰を立てましょう」と立腰を促す指示を共通実践し、習慣化する。	「腰を立てましょう」の声かけにより、立腰を促す指示で姿勢の保持を行うことができた。授業中の児童の姿勢は良いとは言えず、今後、検討が必要である。	B	
③	給食指導や市民科・生活科を中心に、家庭や地域の協力や働きかけを通して、望ましい食生活を習慣化させる。	毎月発行している給食だよりや給食時間の放送、担任が行う日々の給食指導を通して、望ましい食生活を習慣化することができた。	A	食育については、学校だけでなく。家庭でも関心を高めていただけるよう家庭学習やお知らせの方法を工夫していく。給食だよりや給食試食会等の機会も生かして家庭への啓発も図る。
	担任、栄養士、養護教諭がTTで食育の授業を行い、取り扱った食材を給食で調理し味わう活動を取り入れる。またPTAと連携し、栄養士を講師とした給食試食会を実施し、家庭との連携を図る。	食育の授業は、生活科を中心に学年の発達段階に応じて計画し、1年生はグリンピースのさやむき、2年生はとうもろこしの皮むきなど旬の食材を使用した体験活動を実施した。食材に直接触れ、自分たちが関わった食材を給食で食べることで食に対する興味関心を高めることができた。また、PTAと連携し、給食試食会を実施した。栄養士から給食ができるまでの様子や児童の様子についての講話を聴き、実際に試食することで、食に対する保護者の関心を高めることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○生命尊重教育・人権尊重教育と関連しいじめの根絶に向けた取組を推進し、教職員・児童・保護者・地域でいじめを絶対にゆるさない・見逃さない、という共通理解を図る。 ・迅速かつ誠実な対応が図れるよう、日常的な情報共有に努め、初期対応の段階から組織的に対応する。 ・教職員が児童理解の視点を多面的にもち、些細なことも確認し合える組織体制を構築する。 ・ICTを活用したアンケート調査等により、いじめの未然防止に努める。 ・SCや巡回心理士、必要に応じてHEARTS、区教育委員会、警察等の外部機関とも連携して対応する。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	生命尊重教育・人権尊重教育と関連させ、「いじめを絶対にゆるさない・見逃さない」という意識を1児童がもてるよう、市民科の授業を工夫する。また、児童の様子や変容丁寧に捉え、いじめ対策委員会による迅速な組織対応が図れるようにする。	「いじめをゆるさない・見逃さない」という意識を常にもち、行動につなげていけるよう児童と教職員が一体となって取り組んだ。定期的な情報交換や突発的な事態対応のどちらにおいても、迅速かつ組織的に連携を図り、見逃しや放置を防ぐことができた。 今後は、いじめ重大事態の対応等、より一層の理解啓発と組織対応を図る。	A	引き続き、いじめ対策委員会を定期的(月1回以上)に開催し、未然防止に向けた対策の検討、児童の様子を共有、組織的に対応する具体的な手順と手だてを検討し、良好な学校風土づくりに努める。 校内委員会と連動させて個別対応を充実させる。 年度をまたぐ際は特に注意して配慮事項等確実に引き継げるよういじめ対策委員会で情報共有方法を確認し、次年度に支援をつないでいく。 次年度も1学期はじめ学級開きのタイミングでいじめ防止に関する授業を実施し、いじめを許さない見逃さない意識を醸成する。
	教職員はすすんで児童と関わり、一緒に遊んだり、話したり、様子を観察したりしながら、指導が必要な場面では躊躇せず働きかけるようにする。また、管理職への報告を徹底し組織的な対応を図る。さらに、毎週の学年会や生活指導夕会を開催し、細やかな情報交換と具体的対策の検討を行う。	休み時間には、外で子どもと遊んだり、教室で学習指導をしたりして子どもと関わっている教員が多い。また、いけないことは「いけない」と全員共通認識のもと指導をしている。全員がチームとなっていじめにつながるようなことは許さない姿勢を示すことで、同一歩調で指導が進められる。担任が変わってもチームで指導ができる。また、学年団や管理職との連携もスムーズに行い初期対応することで、早めの解決へとつながるようにしている。	A	
	市民科でいじめに関する授業を年間を通して行う。1回目の授業は、5月までに行う。一人一台タブレット端末を活用し、日常的に児童の心身の状態を把握し、アンケート調査で児童が相談できる選択肢を増やす。	トリプルチェンジや市民科の学習を通していじめ根絶に向けた授業を実践した。昨年度から継続して学習をしているので、「やはた」行動などについてもしっかりと理解して、意味も言葉に出して言える。いけない行動を事例と示すことで、はっきりいけない行動が明確になるので分かりやすい。どの学年も内容が同じなので学年を越えて指導できる。いじめのアンケートから悩みを知ることができ、早期対応につながっている。	A	
	目安箱の周知・確認を通して、SCや区巡回相談員、ハーツとの連携を強化し、児童からのどんなSOSにも、組織的に対応できるようにする。	目安箱への児童の相談はなかった。SCや巡回相談員の出勤日には、管理職、各担任、特別支援教育コーディネーター、特別支援教育専門員で情報共有の徹底を図り、児童からSOSや保護者の主訴に、組織的に対応できるようにした。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 特色ある教育活動に関すること

重点目標		○コミュニティスクールの特色を生かし、「地域を愛し、地域に愛される学校」づくりを推進する。 ・「校区教育協働委員会」「ふるさと大原支援本部」との協働・協力の下、人と人とのつながりや関わりを大切に、教育活動の広がりや充実につなげる。 ・金管バンドクラブの活動を、より一層充実させることで、児童と地域との交流活動の推進を図る。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	品川コミュニティ・スクールとしての活動を充実させ、地域の方々との関わりを深める。本年度も、学校評価における肯定的な回答が85%以上となるよう務める。	品川コミュニティ・スクールとしての活動が年々充実してきた。地域との関わりについてのアンケートで、肯定的な回答が85%を超えた。今後は、活動の内容や様子をより広く伝えていく。	A	品川コミュニティ・スクールとしての活動や、町会等と連携した取組について、市民科を中心に教育活動の計画を見直したり充実させたりして学校だよりやHP、市民科授業地区公開講座等の機会を生かして内容を一層広めて理解を得ていく。 金管バンドクラブについては、今後も楽器の整備を計画的に進め、使用楽器が全て自校の楽器となることを目指す。地域からの寄贈や支援により金管バンドが成り立っていること、自分たちの活動が地域貢献につながることを児童に伝え、意識を高めていく。
	「朝のスポーツ健康タイム」、「公園花壇花苗植え活動」、「走り方教室」、「金管バンド指導補助」、「地域の歴史を聞く会」など、校区教育協働委員の方々や各ボランティア、地域施設や町会の方々と協働し、人と人とのつながりや関わりを重視した教育活動を展開する。	各取組では、保護者、町会や地域の方々、卒業生など、実に多くのボランティアの方々に教えていただいたり、参加したりしていただき、大変お世話になった。 地域の歴史を聞く会では、戦前から住んでいらっしゃる元町会長さんを講師に、昔の大原小学校や地域のことについて、貴重なお話を聞くことができた。公園花壇花苗植え活動については、町会へさらに周知を図っていく。	A	
	金管バンドクラブについては、児童の参加に加え、地域の方や保護者の方との交流の場としても位置付ける。練習や発表会等、様々な取組を行いながら、活動を活性化につなげる。	金管バンドクラブは、約40名の児童が参加し、練習がない日でも自主練習に取り組む姿が見られた。全校児童や保護者、地域へ向けた発表の場を設定することで、児童の意欲をさらに引き出すことができた。継続的で充実した活動を維持するためにも、必要な楽器の整備を計画的に進めていく。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成